

※2024年8月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべき箇所を指摘していただきます。

「エデンの園を歩いているのではないと思った」。18世紀後半に南太平洋のタヒチ島を訪れた英航海家、ブーゲンビルの言葉という。英仏など欧州各国が植民地獲得を争った時代。南海の楽園を手中に収めたのはフランスだった▲1942年に保護領とし、その後周辺の島々も領土に加えた。現在の仏領ポリネシアである。画家ゴッギャンら多くのフランス人をとりこにした島を不穏な雲が襲ったのは50年前の夏だ▲74年7月、フランスがムルロア環礁で実施した核実験。気象予測に失敗し、放射能雲が約1200キほど離れたタヒチ上空を通過した。11万人が被ばくしたとする主張もある。マクロン仏大統領は4年前の東京五輪開会

式出席後に島を訪れ、補償拡大を表明したが、謝罪はなかった▲ピックウエーブで知られる島ではパリ五輪のサーフィン競技が開催されている。複雑な思いで見守る島民もいるだろう。90年代には実験を抗議するデモ隊と警官隊が衝突し、独立を求める声が高まったことがある▲フランスは66年から96年まで200回近くの核実験を行った。まもなく「原爆の日を迎えるが、広島や長崎の被爆者はタヒチなどポリネシアの人々と核抑止を目指して交流を続けてきた▲五輪にも光と陰がある。アスリートに声援を送る一方で楽園が汚染された歴史にも目を背けたい。「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」。ゴ

ーギャンがタヒチの人々を宗教画
のように描いた代表作のタイトル
である。